

「はままつ起業家カフェ」オープン。

起業支援の総合窓口、支援メニューも豊富です。

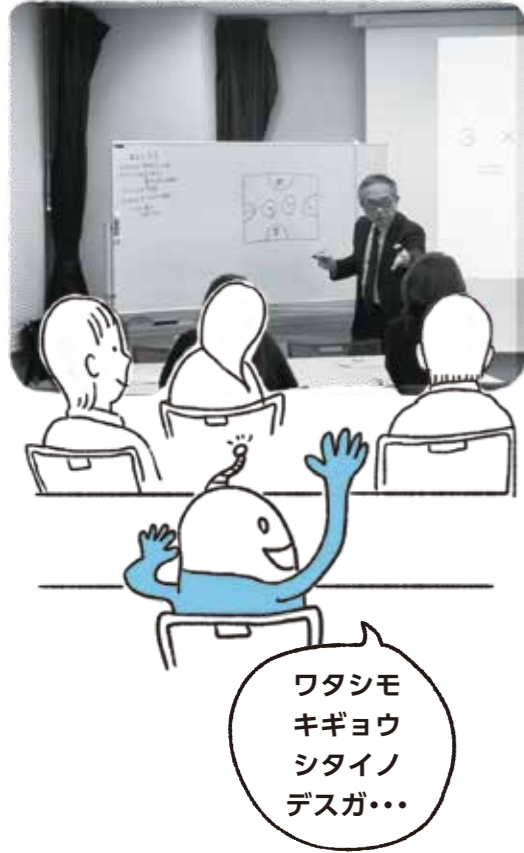
市には起業を志す皆さんのために、地域の産・学・官・金の各機関が連携し、起業に必要な支援を一丸となって総合的に行う「はままつスタートアップ」体制があります。その総合窓口として6月に開設予定の「はままつ起業家カフェ」。ご希望に応じた相談や支援メニューのご紹介をします。今日が起業日和と思ったら、カフェ感覚で気軽に「起業家カフェ」をお訪ねください。いつでも夢の扉は開いています。

浜松で起業を考えるこんな人に

- ・独立や開業を考えている
- ・素敵なお店を開きたい
- ・起業の知識を学びたい
- ・セミナーに参加したい

場所：〒432-8036 浜松市中区東伊場二丁目7-1
浜松商工会議所会館1階

問い合わせ先：産業振興課 ☎457-2044



ワタシモ
キギョウ
シタイノ
デスガ...

「光創起イノベーション研究拠点」完成

新しい光技術で医療など新産業への応用を目指す。

光技術を研究する共同研究「光創起イノベーション研究拠点」が本年1月に静岡大学浜松キャンパスに完成しました。静岡大学と浜松ホトニクス、浜松医科大学、光産業創成大学院大学の4機関が中心となって、多様な分野の研究者、技術者が一つ屋根の下で新しい光技術の研究に励み、医療分野などの新産業への応用を目指します。浜松の光研究の歴史は、1926(大正15)年に浜松高等工業学校(現・静岡大学工学部)で高柳健次郎氏が、世界で初めてブラウン管に「イ」の字を映し出したことに始まります。4機関は「浜松光宣言2013」を掲げ「光創起イノベーション研究拠点」を立ち上げました。100年後の2026年を目標に、レーザーを使って空間に「イ」の字を浮かび上がらせるばかりでなく、物や人物を離れた別の場所で立体的に映し出す「遠隔再現技術」、光を当てるだけで健康状態をチェックできるような技術なども研究。この共同研究棟を活用して、新たな産業やベンチャー企業が育ち、浜松が世界的な光研究の先進地となることが期待されます。

場所：〒432-8011 浜松市中区城北三丁目5-1
静岡大学浜松キャンパス内

問い合わせ先：光創起イノベーション研究拠点 ☎478-1650



やまかの源流

Vol.6
「JR東海浜松工場」

ハママツダヨ
ゼンイン
シュウゴウ



浜松の奇跡、夢の鉄道工場

最高レベルの技術が集結した
鉄道院浜松工場(現JR東海浜松工場)

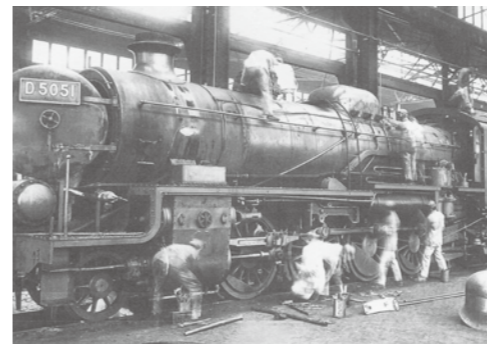
今からおよそ100年前、浜松がまだ「浜松町」だった頃、地域経済人や町民が一丸となって行った大工場の誘致運動があった。そして、全国から技術者が集結。浜松の奇跡、産業都市の始まりだった。



日比谷公園に集結した浜松陳情団(明治42年)



誘致から6年、地域の悲願が達成(写真は、大正9年当時)



全国から最高レベルの技術が集結



現在も高い技術力で新幹線を支える
(写真は毎年夏に開催するイベント「新幹線なるほど発見デー」)

日本に鉄道が走り出したのは1872(明治5)年。文明開化の波は鉄道の普及とともに急速に全国に広がっていき、浜松にも1889(明治22)年、東海道本線の駅が設けられた。そしてさらに発展する鉄道を支えるために、大工場の建設が計画され、浜松も候補地に挙げられた。当時、地元資本の小規模な織物業を主とした地場産業しか持たなかった浜松にとって、大工場の建設は地域の大きな発展につながるものだった。町は町民からの寄付金もあり、用地を確保し準備を始めた。積極的な誘致運動が功を奏し、1906(明治39)年12月に鉄道院浜松工場(現在のJR東海浜松工場)建設が決定した。

ところが、1908(明治41)年12月に突然、政府から建設計画中止命令が伝えられた。工場の位置が機関区を中心より外れているというのだ。この事態は町民にとつて「寝耳に水」。ただちに町民大会が開かれ、町ぐるみの工事再開運動が始まった。そして政府に直訴するためおよそ200人ものほる陳情団を組織し、1909(明治42)年2月、東京に向かったのだ。当時は政府への直接陳情は厳しく禁止されていた。乗車駅を浜松、掛川、袋井などに散らし、変装して憲兵の目を逃れ上京したという。首相官邸では200人もの刑事に阻止されながらも交渉に至り、その後1年にわたる猛運動によって建設復活を勝ち取ったのだ。

1912(大正2)年から操業を始めたこの工場には、全国から優秀な技術者が集まり、機関車の修理を担当。その技術の優秀さは国内外に知られるようになり、創業わずか7年目にして外国製機関車に負けない高速運転、燃費性能に優れたC51型蒸気機関車の製造も任せられるまでになった。工場には当時最高レベルの技術が集積され、さらに、そうした技術が地元企業に伝えられることで、国内有数の「ものづくりのまち」としての基盤が築かれたのだ。本誌5ページの浜松産業の系譜が示すように、この工場の誘致は、当時の浜松の産業にとつて新産業創造の契機だったのである。

そして、工場操業からおよそ100年が経った今、浜松は再び産業の分岐点に立っている。市は新産業創出や起業、海外進出、企業誘致に対して地域の産業、学術研究、金融の各機関と連携した支援体制を築いた。再びイノベーションの奇跡が起きるのは、そう遠くはないかもしれない。